

シッピ川はアメリカ合衆国中央部を南流してメキシコ湾に注ぐ川で、ミネソタ州北部のイタスカ湖に源を発する。ミズーリ川、イリノイ川、オハイオ川、テネシー川などの支流を集め、河口には大三角州をつくっている。日本の領土の長さが概ね3000 kmであるのに対して、ミシシッピ川の全長は3780 kmである。この長さが生徒を惹きつけるのではないかと思われる。

日本との関わりの深さも重要である。

日本は、小麦、大豆、とうもろこしなど、食生活を支える重要な基礎物資のほとんどを海外に依存しており、その最大の輸入先がアメリカ合衆国である。

これらの穀物が生産されるのはミシシッピ上流からロッキー山脈東麓に至る中央平原である。この有数の穀倉地帯で収穫された穀物は、まず陸路でミシシッピ川やその支流のイリノイ川沿いのグリーンエレベーターに約1ヶ月かかって集荷される。河口部に当たるニューオリンズまではバージと呼ばれる「はしけ」で運ばれるのだが、これに要する日数がさらに約1ヶ月かかる。大型船に積み直され、パナマ運河を經由し、太平洋を越えて日本に着くまでにはさらに約1ヶ月を要する。このようなルートを通り、約3ヶ月をかけて日本の食卓に上るのである。その中でミシシッピ川が果たす役割は大きいといえよう。

4 ミシシッピ上流部の景観

今回のプロジェクトではミネソタ州ミネアポリスに滞在する機会を得た。ミネアポリス、セントポールはミシシッピ川を挟んで相對する「Twin Cities (双子の町)」であり、またミネアポリスの名は、アメリカ先住民コタ族の言葉で「水」を意味する「ミネ」と、ギリシャ語の「都」を意味する「ポリス」から付けられたものである。「川」と関わりの深い町と言えよう。

ミネソタ州内にあるミシシッピ川の最上流部では、歩いてわずか6歩ほどの川幅であるのに、同じ州内のミネアポリスでは貨物船が航行できる川幅にまで広がっていることもアメリカの大きさを印象づけるであろう。

滞在中何度も川の流れを目にし、ミシシッピ川に浮かぶバージの様子も眺めることができた。上流部とはいえ、大型の貨物船も航行しており、我々がもつ川のイメージとは大きく異なっていた。

川の至る所にダムがあるということを知り、見学に出かけたのだが、日本にある高低差の大きなダムではなく、落差数メートルほどのものばかりだった。何キロかおきにこのようなダムが点在しているのだそうだ。このダムで作られた電力がミネアポリス市内で利用されているとのことだった。日本のように山岳部で水力発電を行うと、電気抵抗が生じ、

